

2019年9月

認定 NPO 法人 みんなでお城をつくる会

立ち枯らしの試験伐採に手応え 2019年8月25日



NPO みんなでお城をつくる会では、小田原城天守を木造で復原するための木材を天守の森の樹齢200～300年の大径木と定めています。近い将来、最もいい条件で伐採搬出する為に、実証試験に取り組んでいます。この度、辻村山林の樹齢69年のスギを用いて立ち枯らし試験伐採を行い、良好な状態が確認できました。



木材の伐り旬

昔から木材の伐り旬についての言い伝えが世界中にあります。例えばストラディヴァリウス級のバイオリンを目指す工房の職人たちは、クリスマス前後の下弦の月から新月の前までに伐採する事を伐採者に指示するという事を今でも守っていると聞きます。日本でも、彼岸を過ぎてから彼岸までに伐採すると言う事が少なくとも昭和30年ごろまでは山の仕事をする人々にとっては常識だと古者に聞きました。

そしてもっと厳密に言えば冬期の、闇夜の頃（下弦から新月前までをさす）に伐るといっています。

ただ、法隆寺金堂、薬師寺西塔を手がけた西岡常一棟梁は「木六竹八」と言って木は旧暦の6月の闇夜の頃に伐るといっていますが、新月の前までに伐ることは共通しています。

私たちは、2014年に小田原で行われた第30回全国削ろう会でイベントの目玉の一つとして「天守の森」から樹齢約200年の杉を新月伐採し4ヶ月葉枯らしをして製材しました。その後、この木は小田原城天守最上階のリニューアルにともなった木造空間を作るために寄贈し、柱や建具の羽目板などに使われました。棟梁からは、当会が寄贈した木材はとても飽のかかりがよいと褒められました。



何故立ち枯らしなのか

大径木の乾燥はやはり天然乾燥が一番よいと思います。しかし、伐採地の条件次第で倒すことが困難なところもあります。そうすると、葉枯らしが出来ず、生のままの材を搬出せざるを得ない事があり、そのような木で大きな木造建造物を建てると様々な問題が出る事はすでに木造で再建された天守の事例からも分かっています。この問題を解決する為に、昔から世界中で行われていた立ち枯らしの方法で試験伐採する事にしました。

今回の立ち枯らしの方法は、最初に根元に 2cm 程度の切り込みを全周に入れ、そこから 30 cm 上に同じように切り込みを入れ、その途中の皮を剥ぎました。その作業を 2018 年 12 月 2 日に行い、2019 年 8 月 25 日に伐倒しました。芯の部分はまだ湿った感じがありましたが辺材はととてもよく乾いていました。伐採してから 4~5 月以降まで皮を剥かず放置しておくとも必ず虫害にあい、大きな穴を開けるか、表面に網の目上の食害がありますが、芯部へ向かって穴を空ける虫がつかず、表面のわずかな食害が見受けられる状況でした。今後しばらく乾燥の進み具合や割れの走り方などを経過観察した後、用材として活用する予定です。



記録を取る

日本の職人仕事は口伝といって記録を取る事にあまり重きを置いていません。しかし、いまやその口伝が途切れつつある中で記録を取っていく事はとても大事です。そこで私たちは何時どこでどのような方法で伐採したか、大勢の方にも見届けていただき、より確かな記録を取ることが出来ました。

今回の記録は『NPO 新月の木国際協会-新月伐採履歴 ID カード-』のフォーマットに則って記録しました。樹種 杉 樹齢 69 年 樹高 22m 胸高直径 42cm 緯度、経度、日時、山林所有者、伐採者、現認者などを記録しています。この木が今後どのように使われていくかは未定ですが、この記録が残って何らかの形になっても、この木の経年変化を観測できる事になります。奈良の元興寺には一部に 1400 年前の木材が使われている事が年輪測定法によって分かっていますが、何時どこでどのように伐られたかの記録はありません。今回伐採した木の記録を残せば、後世の人に大事な資料を残す事になります。この試験伐採が天守復元後 300 年以上経った時に天守の貴重な資料になることを確信しています。

知っていますか？ X と Y



とても外観上よく似ているヒノキとサワラ。その葉に見分けたのヒントがあります。葉の裏側に白い気孔帯があり、サワラは X、ヒノキは Y に見えます

